

道産木材安定供給に関する 意見交換会

令和6年11月1日（札幌会場）

令和6年11月5日（釧路会場）

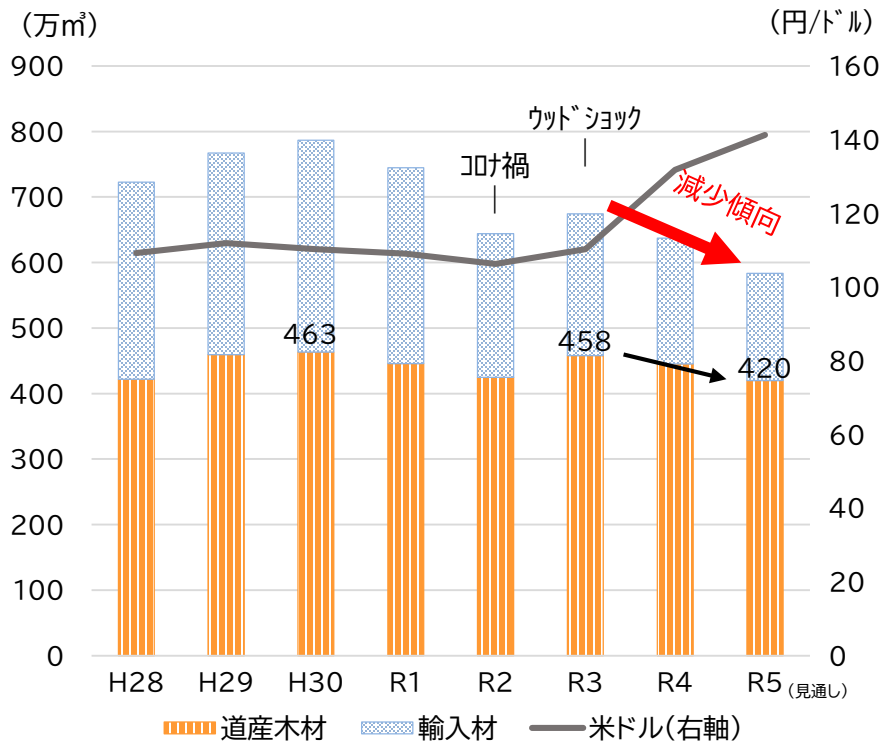
主催 北海道、北海道木材産業協同組合連合会

協力 北海道森林組合連合会

道産木材供給量の推移

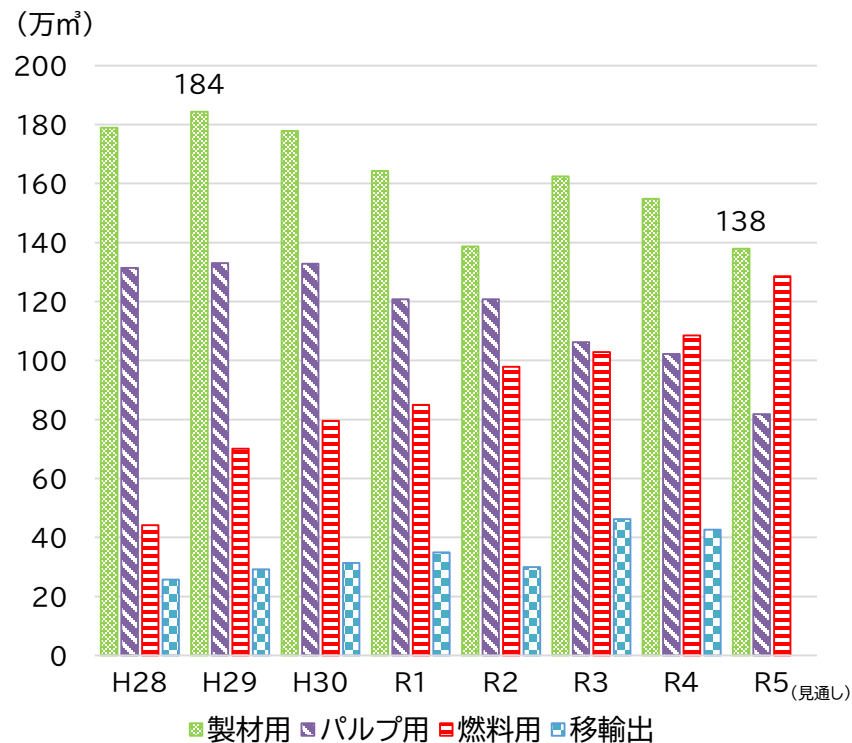
- 道内の道産木材供給量は、近年減少傾向で推移しており、令和5年度は約420万m³に落ち込む見通し
- 住宅着工数の減少などにより、道産木材の製材需要は減少傾向であるが、燃料用材や移出量・輸出量は増加傾向

道内の木材供給量の推移



- 道内の木材供給量は、R3のウッドショックで一時持ち直すも減少傾向。
- 先行き不透明な国際情勢、円安の進行により輸入材は減少傾向。
- 輸入材から道産木材へ転換する動きはあるものの、道産木材供給量は直近のピーク463万m³(H30)から、R5には約420万m³と43万m³程度落ち込む見通し。

道産木材の主な用途別需要量の推移



- 住宅着工数の減少などにより、製材需要は減少傾向にあり、R5は138万m³でH29より46万m³減少する見通し。
- パルプ需要は減少傾向にあるが、燃料用材は増加傾向にあり、需給がタイトになっている。
- R4の移出量・輸出量は、43万m³(トド15万m³、カラ18万m³ほか)となっている。

釧路市内における大型木材加工施設の建設計画

< 新会社・工場の概要 >

- 会社名：株式会社 釧路ウッドプロダクツ(仮称)
- 所在地：釧路市(日本製紙工場跡地)
- 出資社：(株)サイプレス・スナダヤ(80%) 中部電力(株)(20%)
- 従業員数：80~90名(操業開始後3年目1シフト稼働時見込み)
- 設立年月：R6年(2024年)11月(予定)
- 事業内容：国産材の製材、集成材の製造、販売
- 原料樹種：道産トドマツ主体 その他道産針葉樹全般
- 原木消費量：操業1年目 約10万m³/年
操業2年目 約20万m³/年
操業3年目 約36万m³/年 を計画
- 生産品目：(主製品)構造用集成材、2×4材
(副製品)製紙用チップ、ペレット、おが屑

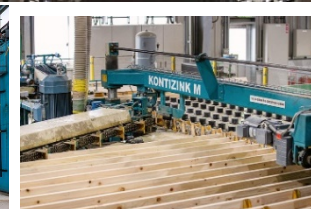
< 今後のスケジュール >

- R6年(2024年)11月 合併会社設立
- R7年(2025年)5月 製材工場 着工予定
- R9年(2027年)4月 製材工場 稼働予定

<< 参考 >>

< (株)サイプレス・スナダヤ概要 >

- 所在：愛媛県西条市
- 創業：明治25年(1892年)
- ヒノキを中心にスギ・トドマツ等の製材・集成材(CLT含む)を生産
- 2018年に西条市内に新工場開設。2023年に(株)大林組と提携
- 売上高：約120億円(R6年(2024年)3月期)
- 従業員：190名
- 原木消費量：30万m³/年(R5年度(2023年度))

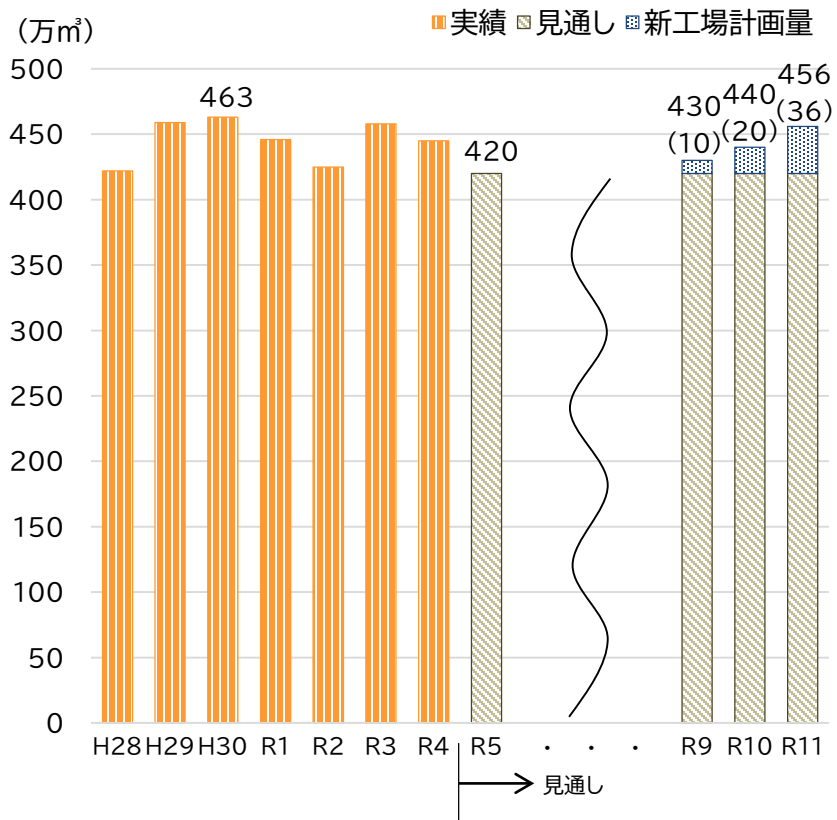


※会社HPより

今後の道産木材供給量

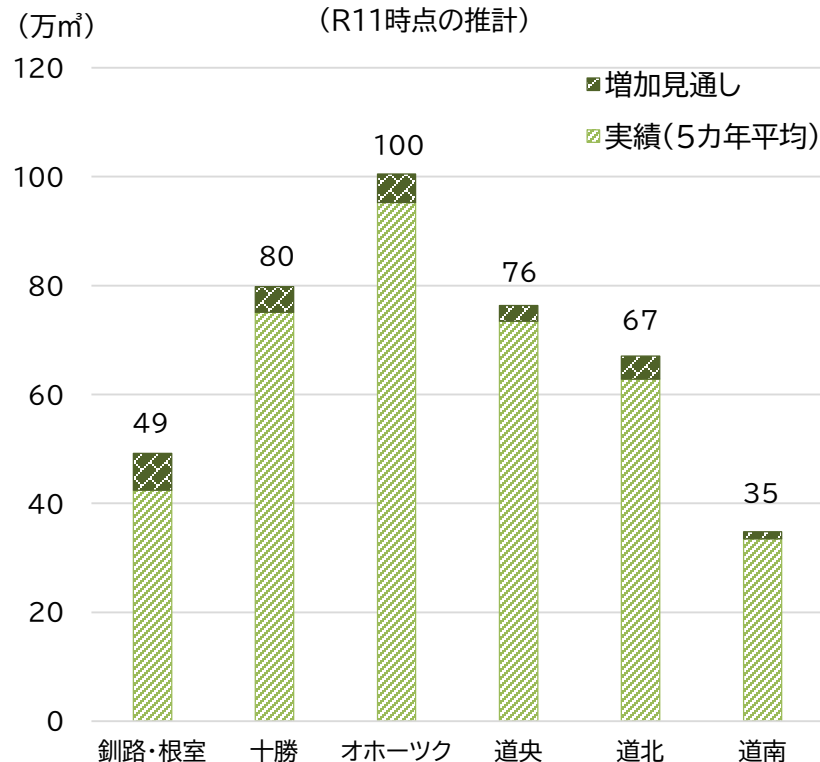
- 新工場の計画量を踏まえた道産木材供給量は、稼働3年目の令和11年で現状420万 m^3 から36万 m^3 増加する見通し
- 道東地域に限らず、全道各地において供給量が増加する見通し

今後の道産木材供給量見通し



- 直近の道産木材供給量と同水準であると仮定した場合、新工場の計画量を踏まえた道産木材供給量は、稼働3年目のR11で36万 m^3 増加する見通し。

道産針葉樹の地域別供給量



※ H30～R4の5カ年平均の伐採量や木材流通商社等からの聞き取りをもとに道が推計(R6.10月時点)

- R11の道産針葉樹の地域別供給量は、各地域で直近5カ年平均(H30～R4)よりも増加。
- オホーツク、十勝、道央等からの供給量が多く、釧路・根室は、下から2番目となる見通し。

関係者の主な意見と懸念される事項

- 新工場進出により、道産建築材の利用拡大や、原木の安定需要先の確保による林業の活性化などが期待される一方、原木調達量がこれまでになく大規模であることから、既存製材工場の原木調達等に影響が出る可能性
- 新工場の原木調達計画の具体的な内容が不明であり、現在の人工林資源で原木調達が可能なのか懸念
- 今後、増伐による原木供給が必要だが、担い手不足などにより、増伐及び着実な再植林の実効性に懸念

区分		関係者の主な意見	懸念される事項	対応の方向
資源への影響	資源の保続	<ul style="list-style-type: none"> ・本州のスギやヒノキに比べ、トドマツは成長率が低く、現実の資源賦存量を考えると、必要な原木数量を十分に供給できるか疑問 ・伐採量の増加が見込まれるため、森林資源の保続が心配 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人工林資源の減少 <ul style="list-style-type: none"> ・釧路地域をはじめ近隣地域のトドマツ資源が減少し、将来的な原木供給量が不足 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 森林資源の適切な管理
	林業・木材産業への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・新工場の原木調達量が大きく、既存工場の調達に影響が出る ・作業員の確保ができず、大幅な伐採量の増加は困難 ・国有林の公売等における原木価格が高騰 ・全道域からの原木集荷は、トラック・ドライバーが不足している中、運材の状況が悪化 ・トドマツは運材時期が集中するため、既存工場の運材とバッティングする ・高い賃金水準が想定される新工場に、既存工場の従業員が流れてしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既存工場の原木調達量の減少 <ul style="list-style-type: none"> ・急激な原木需要の増加により、既存工場が必要とする原木の確保が難しくなる ・需給の逼迫により原木価格が高騰 ○ トラック不足等による運材の停滞 <ul style="list-style-type: none"> ・運材車の確保が困難となり、運材の遅れ等が発生 ・運材の競合による運賃コストの上昇 ○ 既存工場の工員の不足 <ul style="list-style-type: none"> ・地元工場の工員確保が難しくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 原木の供給力向上 ■ 木材産業の競争力強化
	着実な植林	<ul style="list-style-type: none"> ・スナダヤは伐採後の再植林にも関与すべき ・伐採後の植林の担い手確保が課題 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 造林未済地の増加 <ul style="list-style-type: none"> ・作業員不足等により、再植林が追い付かず、伐採跡地が増加 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 伐採後の着実な植林

「北海道林業・木材産業に関する連絡会議」の開催

- 「第13回北海道林業・木材産業に関する連絡会議」を開催し、大規模木材加工施設の建設計画を踏まえた本道林業・木材産業への影響や今後の対応方向について、構成員と意見交換を実施
- 参加者から「木材需給見通しを踏まえた森林資源の推移などの試算を示してほしい」との意見

【第13回北海道林業・木材産業に関する連絡会議】

■開催日時：令和6年10月22日(火) 13:30～14:30 ■開催場所：道庁10階水産林務部1号会議室（オンライン併用）

■参加者：（構成員）林業・木材産業関係団体、木材流通商社、北海道森林管理局、道庁水産林務部関係各課（オブザーバー参加）道総研林産試験場

■議題：1. 本道の林業・木材産業を取り巻く情勢を踏まえた課題と今後の対応について

- ① 道産木材供給量の推移
- ② 釧路市内における大型木材加工施設の建設計画
- ③ 今後の道産木材供給量
- ④ 関係者の主な意見と懸念される事項

2. その他

【構成員からのご意見】

- ・ 道産木材の需要量について、トドマツの推移も示してほしい。
- ・ 今後予測される地域別の森林資源量や伐採量などによる試算を示すべき。

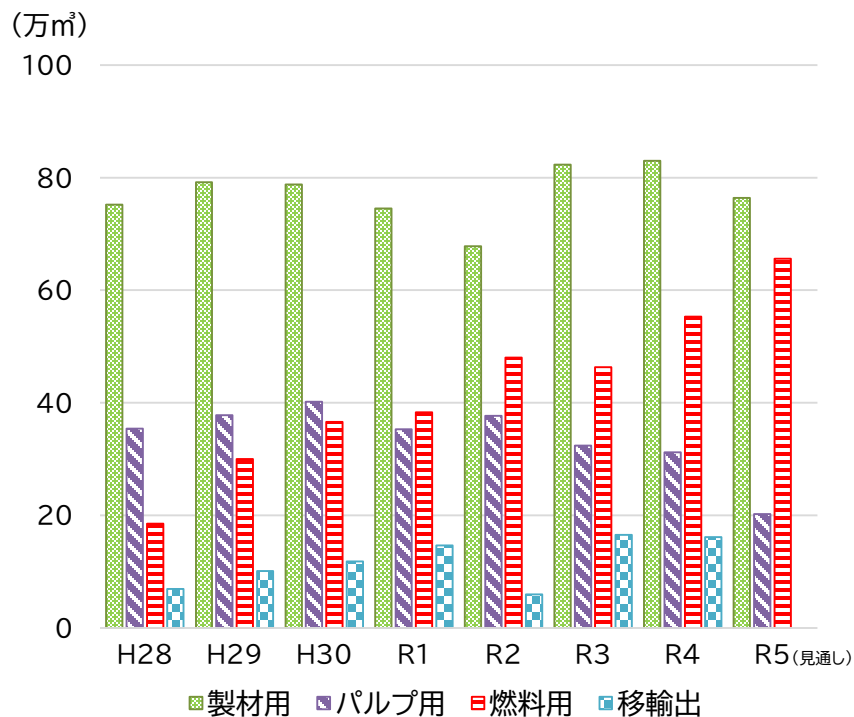
【道産木材安定供給に関する意見交換会】

- 連絡会議における構成員のご意見を踏まえ、次の資料を追加
 - ・ 樹種別の道産木材需要の推移
 - ・ トドマツ人工林の面積及び伐採量の推移
 - ・ トドマツ人工林資源を踏まえた主伐上限量（主伐実績や地域別供給量との比較）

樹種別の道産木材需要量の推移

- 製材需要は、エゾ・トドは横ばいで推移し、カラマツは減少の傾向
- パルプ用材は、どちらも減少傾向、燃料用材はどちらも増加傾向

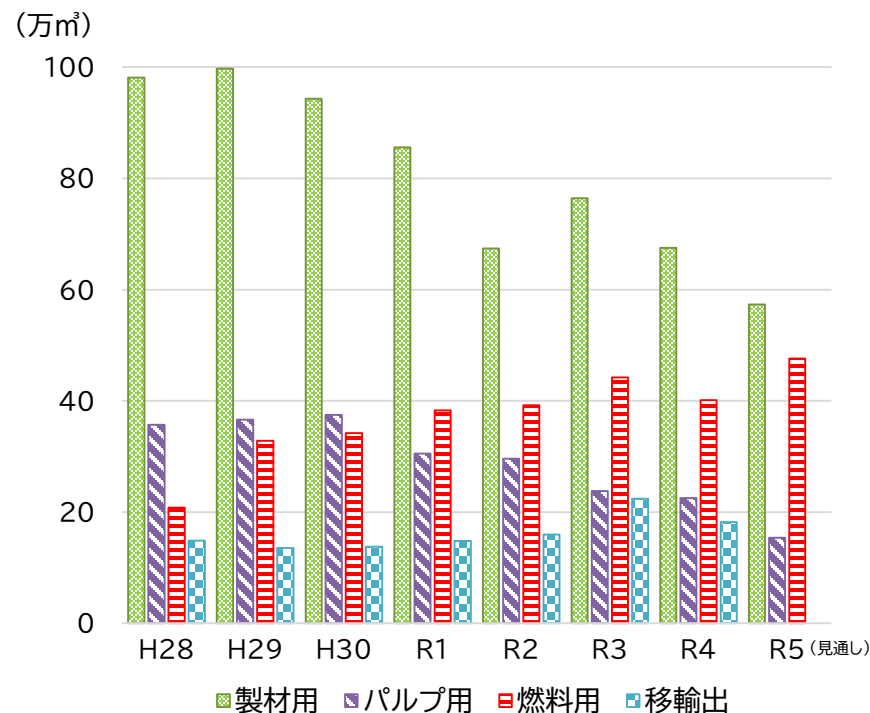
エゾ・トドの主な用途別需要量の推移



※ 燃料用は各年度の未利用材の総量から樹種別伐採量で按分して道が推計
 ※ 移輸出のH28～H30は、R1～R4の実績割合をもとに道が推計

- 製材用はR3のウッドショックで一時持ち直したが、R5には再度減少に転じる見通し。
- パルプ需要は減少傾向にあるが、燃料用材は増加傾向。
- 移輸出は増加傾向。

カラマツの主な用途別需要量の推移



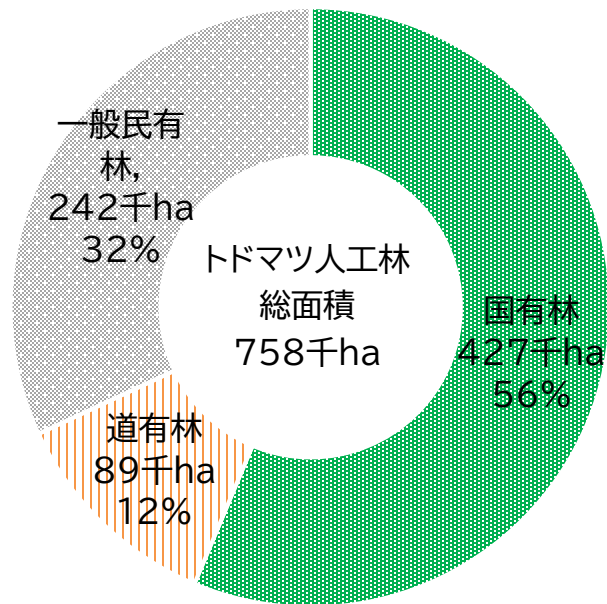
※ 燃料用は各年度の未利用材の総量から樹種別伐採量で按分して道が推計
 ※ 移輸出は全て移出量

- 製材用はR3のウッドショックで一時持ち直すも減少傾向。
- 製材用の直近のピーク98万m³(H29)から、R5には57万m³と、41万m³落ち込む見通し。
- パルプ需要は減少傾向にあるが、燃料用材は増加傾向。
- 移輸出はR3のウッドショックで一時増えたが、横ばい傾向。

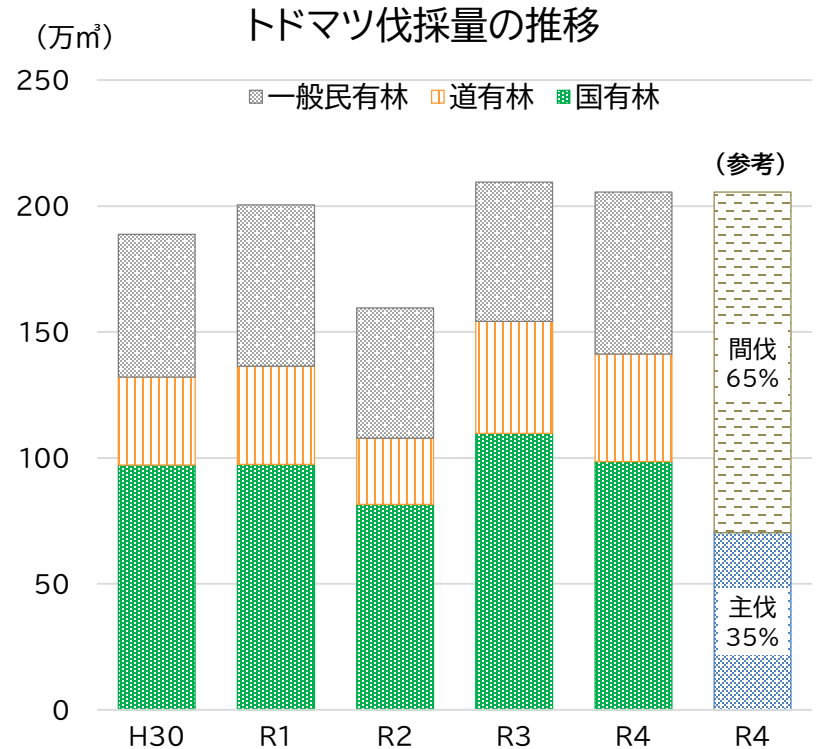
トドマツ人工林の面積及び伐採量の推移

- 道内のトドマツ人工林資源は、総面積の70%を国・道有林が占めている
- トドマツ伐採量の70%を国・道有林が占め、間伐が全体の65%を占めている

トドマツ人工林の面積割合(所管別)



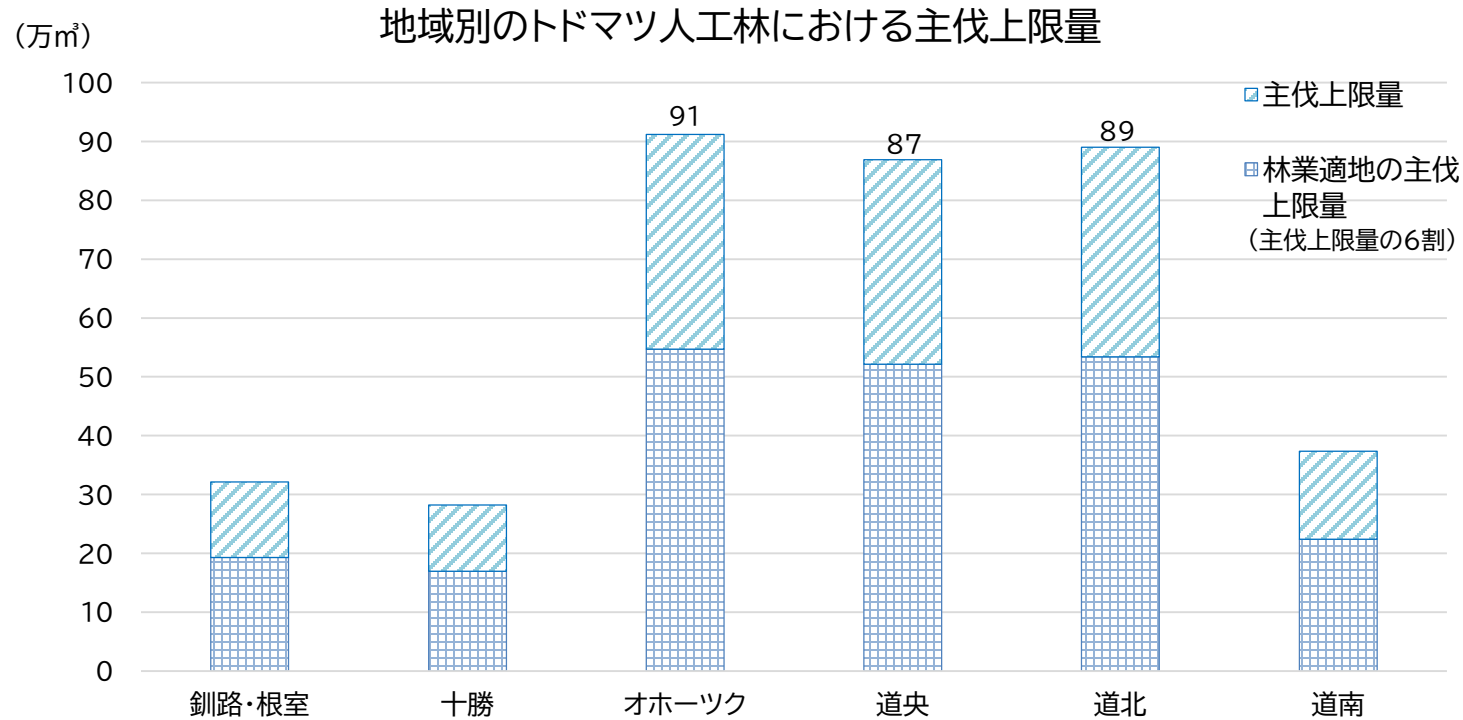
- 道内のトドマツ人工林面積のうち、国有林が約43万haで約56%と最も多く、道有林が約9万haで約12%を占める。



- R2のコロナ禍で伐採量は減少したが、R3のウッドショックで持ち直し、R4は横ばい。
- R4伐採量の所管別内訳は、国有林が97万m³で50%、道有林が37万m³で19%、一般民有林が58万m³で30%。
- R4伐採量の伐採種内訳は、主伐が70万m³で35%、間伐が135万m³で65%。

トドマツ人工林資源を踏まえた主伐上限量の試算

- 森林調査簿のトドマツ人工林資源をもとに、今後50年間、毎年主伐し続けても資源の保続が可能な伐採量（主伐上限量）の目安は、北海道全体で365万 m^3 /年と試算
- 林道からの距離などを勘案し、トドマツ資源量の6割が林業適地と仮定した場合、主伐上限量は、全道で約219万 m^3 /年となり、地域別にはオホーツク、道北、道央が多い



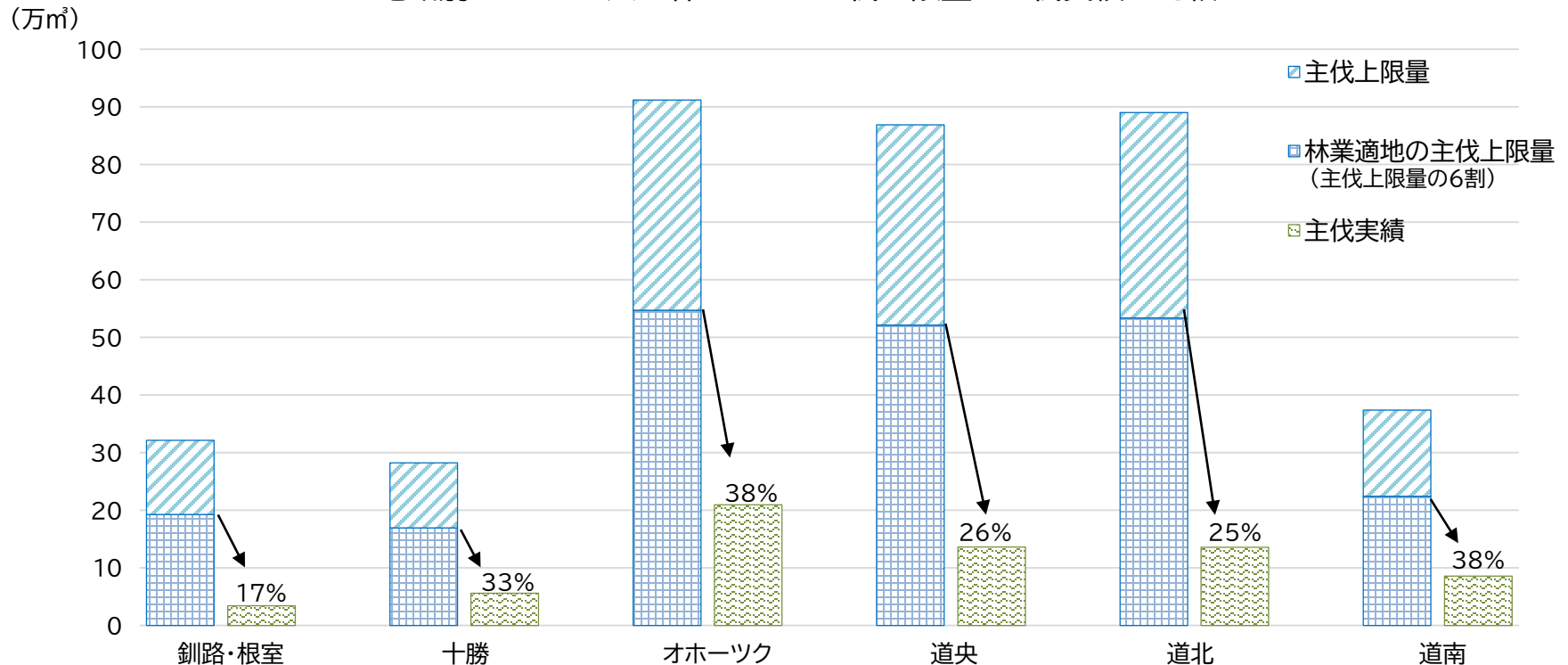
※ 主伐上限量・・・地域森林計画における考え方を準用し、森林調査簿の資源量から試算した今後50年主伐し続けることが可能な年間の主伐量
※ 林業適地の主伐上限量・・・トドマツ人工林の全体の6割が林業適地と仮定した場合の主伐上限量

- 全道のトドマツ人工林の主伐上限量は、365万 m^3 /年で、全体の6割が林業適地と仮定した場合は、219万 m^3 /年と推計。
- 主伐上限量は、オホーツク91万 m^3 (25%)、道北89万 m^3 (24%)、道央87万 m^3 (24%)の順に多く、この3地域で全道の約73%を占める。

トドマツ人工林資源を踏まえた主伐上限量と主伐実績の比較

- トドマツ人工林における「林業適地の主伐上限量」に占める主伐実績(直近5カ年平均)の割合は、全道平均で3割程度
- 地域別では、オホーツク、道南、十勝で33～38%となっている

地域別のトドマツ人工林における主伐上限量と主伐実績の比較



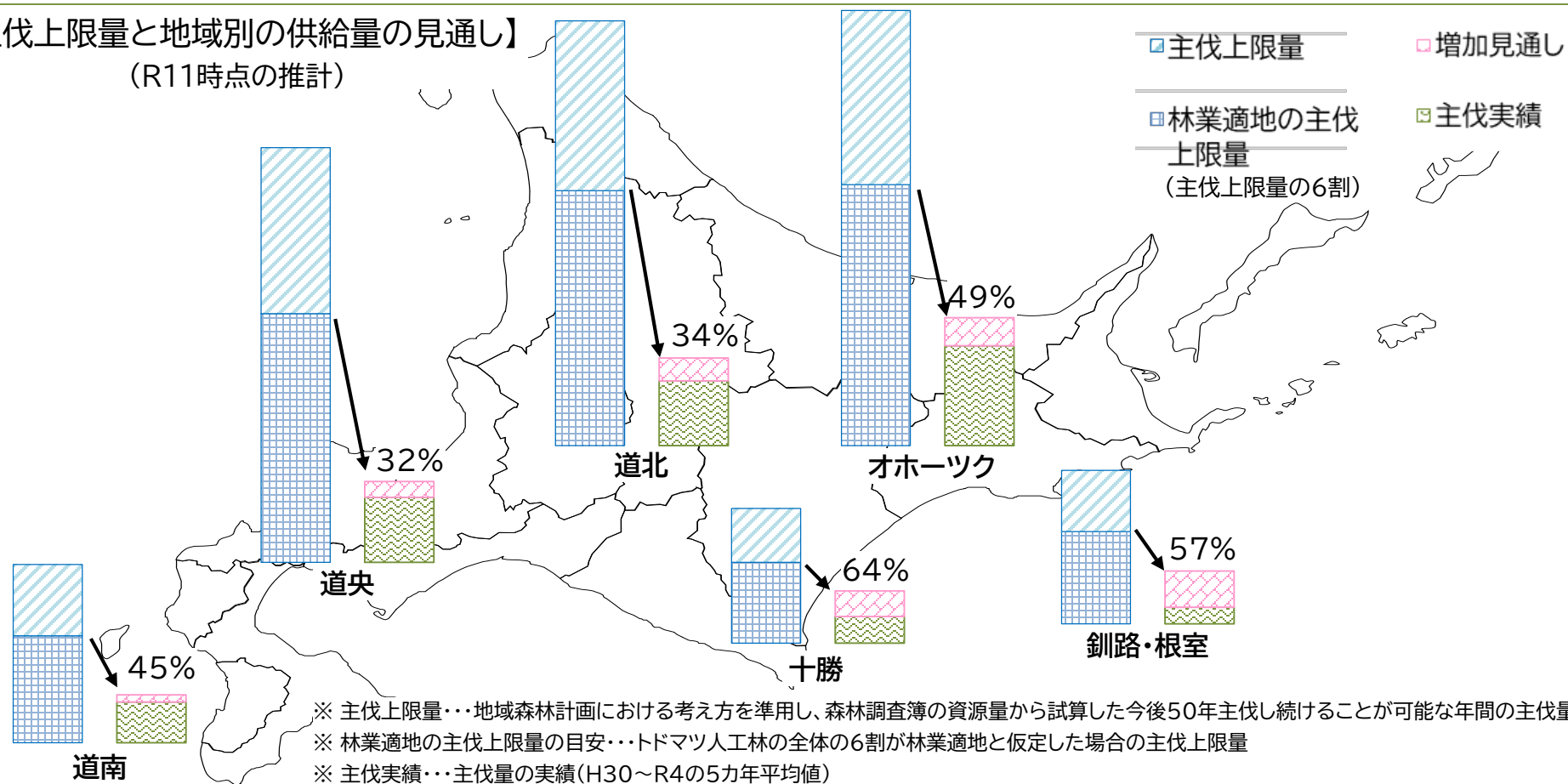
※ 主伐実績・・・主伐量の実績(H30～R4の5カ年平均値)

- 全道の主伐実績は、直近5カ年平均で66万m³。
- 地域別の主伐実績は、オホーツク、道央、道北の順に多い。
- 「林業適地の主伐上限量」に占める主伐量の割合は、全道平均で30%であり、オホーツク38%、道南38%、十勝33%の順に多く、釧路・根室は17%と最低。

トドマツ人工林資源を踏まえた地域別の主伐上限量と供給量の見通し

- 令和11年時点の供給量の増加見通しが全てトドマツ主伐であると仮定した場合、主伐量が「林業適地の主伐上限量」に占める割合は、全道平均で43%（32～64%）と推計
- 地域別では、十勝、釧路・根室、オホーツクの順となり、道東地域で割合が高い

【主伐上限量と地域別の供給量の見通し】
(R11時点の推計)



- ※ 主伐上限量…地域森林計画における考え方を準用し、森林調査簿の資源量から試算した今後50年主伐し続けることが可能な年間の主伐量
- ※ 林業適地の主伐上限量の目安…トドマツ人工林の全体の6割が林業適地と仮定した場合の主伐上限量
- ※ 主伐実績…主伐量の実績(H30～R4の5カ年平均値)
- ※ 増加見通し…伐採量は主伐に加え、間伐を含んだ推計値

- 今後の供給量の増加見通しが全てトドマツ主伐であると仮定した場合、主伐実績と増加分の合計が「林業適地の主伐上限量」に占める割合は、全道平均で43%。
- 地域別では、十勝約64%、釧路・根室約57%、オホーツク約49%の順となり、道東地域で割合が高い。